

(二十四)

遊齋は、冷たい床の上に座して、二胡を弾いている。

この国——本朝の旋律ではない。

遠い、異国の響きがある。

天竺か、波斯か、西の果ての国の旋律であろうか。

その音が、ゆるくうねりながら伸び、時に高く、時に低く、闇の中に流れてゆくのである。

胡座した遊齋の前に、赤い櫛が置かれている。

妙が髪に挿していた櫛だ。

その横に、小ぶりの瓶子がひとつ。その瓶子の口には、木の栓がはめられている。

左横に置かれているのは、遊齋がいつも手にしている杖であった。

遊齋が、口の中で何か唱えている。

唄のような、異国の呪のような、どこか哀切な響きを持った声であった。

小さな祠であった。

それでも、十畳ほどの広さはあるであろうか。

遊齋が向いた北の壁に棚がしつらえてあって、そこに、向き合わせになった狐の像がふたつ並

んでいる。

遊齋が背にしているのが、この祠に入ってくるための観音開きの扉であった。

左の壁に背をあずけて、間宮林太郎が座している。

左の片膝を立て、剣を左肩に立てかけるように、両手で抱え込んでいる。

外は、暗い。

わずかながら、月の光がありそうな夜の色であった。

狐の像が載せられた棚をはさむように、左右の床に一本ずつ燈台が置かれ、それぞれに蠟燭が立てられて、そこに炎が燃えている。

それでも、闇が濃い。

部屋の隅や、あちこちに、うずくまる黒い獣の背のように闇がわだかまっている。

すでに、夜半を回っている。

「こんなことでよいのですか、遊齋どの——」

間宮林太郎が、不安気につぶやいた。

二胡を弾く手が止まった。

「気長に……」

唄うのをやめて、遊齋がつぶやく。

「夕刻から始めて、かなりの刻が過ぎているが……」

「うまくゆくかゆかぬかは、明日の朝になればわかりましょう」

言って、遊齋は、また二胡を弾きはじめた。

再び、遊齋の喉から唄が滑り出てくる。

幾許かの刻が過ぎて、ふいに、

「まいりましたよ……」

遊齋がつぶやいた。

「なに!？」

間宮林太郎が、あずけていた背を壁から離した。

遊齋の、二胡を弾く手は止まらない。

やがて――

みしり、

みしり、

と、木の軋る音が聴こえてきた。

祠の周囲をかこんでいる回廊状の板まであがつてくる階の軋る音であった。

ほどなく、扉の向こうに、何かが立ち止まる気配があった。

きい……

と、扉が引きあけられる音がした。

黒い影が、そこに立っている。

二胡の音が止んだ。

「どうぞ、お入り下さい」

遊齋が、扉に背を向けたまま言った。

ぎ

ぎ

ぎ、

と、床を低く鳴らしながら、黒い影が入ってきた。

遊齋が、ここで、ようやく二胡と弓を置き、足を組みかえて、後方をふり返った。暗いふたつの灯りが、その影の顔を照らしていた。

そこに立っていたのは、ありた屋の主、仁左衛門であつた。

顔色が、青い。

この時には、すでに間宮林太郎は、剣を左手に下げて、遊齋の横に立っている。

「あなたでござりましたか……」

遊齋が言う。

「仁左衛門にござります」

仁左衛門が、涙を煮るような声で言った。

「どうぞ、そこへ……」

遊齋が言うと、仁左衛門がそこにちよこんと座した。

正座である。

「間宮さまも、どうぞ」

遊齋にうながされ、

「う、うむ……」

間宮林太郎が、遊齋の横に座した。

「どうしてここへ？」

遊齋が問う。

「あなたさまが、ここで、何やらとりおこなうとのこと。それが気になりまして——」

仁左衛門の眼が、微かに光る。

「このことでしょうか」

遊齋が、左手に握っていたものを床の上に置いた。

赤い、楡であった。

遊齋、ふり返る時に、床に置いていた楡を左手に取ってから、足を組みかえたのであろう。

ひくりと鼻の穴をふくらませ、

「おう……」

仁左衛門が、声をあげる。

「それで、何かわかりましたか……」

仁左衛門が問うてくる。

「はら」

遊齋がうなづく。

「何がでござりましょう」

「お妙さまと、進三郎さんをだれが殺したかということが……」

「いつ？」

「たった今です」

「今？」

仁左衛門の言葉に、遊斎が沈黙する。

ごくり、

と、間宮林太郎が、唾を呑み込む音が響く。

「あなただったのですね」

「わたくしのことですか」

「はら」

「何のことでしょう」

「ですから、お妙さまと進三郎さんを殺めたのがです……」

「何をおっしゃいますのやら——」

「わたしたちを殺すために、やってきたのでしよう」

「とんでもないことを……」

「だって、あなたは、畏れておいでです……」

「何をです？」

「この臭いの中に……」

「臭い？」

ぴくりと、仁左衛門の鼻が動く。

「この櫛の話をしていきましょう」

遊斎が、再び櫛を手に握った。

「櫛？」

「この櫛を使って、何かなさいましたね」

「はて？」

「櫛をお領かりして、ここで呪法じゆほうをとりおこなうと申しあげたのは、あれは嘘だったのです

……」

「嘘？」

「あなたをおびき出すための嘘ですよ」

「……………」

「昨日の時点では、まだ、誰がお妙さまと進三郎さんを殺めたのか、わたしにはわかっておりませんでした。それで、この櫛を使って呪法するという話をし、わざわざその場所まで、あの場で口にしたのです——」

「——」

「一度でも、呪法を試みた者は、呪法を信じ、呪法を畏れます。それが気になって、確かめずにはいられなくなります。それで、あなたは、ここへやってきた……」

「何をおっしゃいます」

「ただ、わからないことがあります」

「わからないこと？」

「それは、あなたが、どうして、お妙さまと進三郎さんを殺めねばならなかったのかということ  
です」

遊齋が言うと、仁左衛門は、座したまま両手を床につき、身体をまわしてふたりに背を向けた。

その肩と首が下がっている。

その身体が、小刻みに震えていた。

どうやら、仁左衛門は泣いているらしい。

おう……

おう……

おうおう……

ひいひい……

仁左衛門の噎<sup>むせ</sup>び泣く低い声が、闇に響いた。

「だって……」

仁左衛門が、声をやっと絞<sup>しぼ</sup>り出すように言った。

「だって、遊齋さま、あのふたりは、わたしの可愛<sup>げんじ</sup>い源治郎<sup>ろう</sup>を殺したのですよ……」

その声が震えている。

「しかし、進三郎さんは、あなたの息子さんではありませんか？」

「そうです。ですから、はじめは進三郎を殺すつもりはなかったのです……」

「それが、どうして？」

「だって、進三郎は、誰が妙を殺したのか知ってしまったのですよ。つまり、わたしが、誰が源治郎を殺したのか知っていることを知ってしまったのです……」

「なんと……」

「これは、店を守るためには、進三郎にも死んでもらうしかないではありませんか」

「それで、息子さんを——」

「いけませんか」

落とした肩の向こうで、ゆっくりと、仁左衛門の首が起こされてゆく。

「ですから、あなたたちにも死んでいただきますよ」

首が、正常の位置まで起こされていた。

しかし、首の動きはそれで止まらなかった。

ゆっくりと、首が天井を見あげてゆく。

「だって——」

天井を見あげながら、仁左衛門が言う。

「だって？」

「わたしは、息子の進三郎を殺してしまったのですから——」

ふいに、仁左衛門の首が、こちらを向いた。

通常のふり向き方ではない。

横ではなく、縦であった。

首だけが、のけぞるように天井を向き、その首がさらに折れ曲がって、遊斎と間宮林太郎を逆

さの顔で睨んだのである。

その唇が、にいいつ、と笑っている。

みちつ、

みちつ、

と、音がしていた。

仁左衛門の身体の骨が、変形してゆく音だ。

仁左衛門の身体が、歪ゆがんでゆく。

それに耐えきれず、

「化物！」

間宮林太郎が、抜刀していた。

(つづく)